

Jill S. Steefel : Dysphagia Rehabilitation for Neurologically Impaired Adults

柴田貞雄 (国立身障リハセンター) 監訳

嚥下障害のリハビリテーション

— 訓練と食餌計画の実際 —

近藤克則 (国立療養所東京病院理学診療科)

嚥下障害は、生命維持にかかわる重要な障害でありながら、リハビリテーション医学のなかでも比較的新しい領域であり、それへの治療的アプローチも確立しているとは言い難い。そのため、嚥下障害が予想される患者に液体を無造作に与えるという危険なことが、家族によってだけでなく、医療スタッフによってすら行われているのが実状ではなかろうか。今までの嚥下についての成書といえば、障害児に対する摂食指導に関するものに限られていたことも、その一因であろう。

本書は、言語療法士である著者が、成人の神経疾患患者の嚥下障害に焦点を絞りまとめた本である。第Ⅰ部「基礎」は、嚥下の生理と嚥下障害の問題点についてコンパクトにまとめている。第Ⅱ部

「評価」では、特殊なあるいは高価な装置などに頼らず、患者の身体所見と摂食試行の注意深い観察のポイントについて述べている。そして一番多くのページがさかれた第Ⅲ部「治療」では、著者が経験から産み出した方法が、実践的かつ具体的に述べられている。例えば、患者が最も空腹で食欲があるときに訓練を行うための時間帯設定についてや、ストローとスプーンの使い分け方、代替摂食法として経管栄養を併用する場合のチューブの太さの選択の目安などである。さらに、嚥下訓練の際に何よりも優先すべき患者の安全確保の方法についても、姿勢や“2回目の嚥下”、随意的な咳の利用などを紹介している。私も脳卒中の嚥下障害については強い関心をもっているが、あらためて教えら

れる点が多かった。

本書の特徴は、嚥下障害者用特別食の開発とその段階的な与え方を提案している点であろう。著者は、嚥下障害の程度を6つのレベルに分け、それに対応した段階的な食餌を固形物(5段階)と液体(4段階)それぞれの例を実に具体的に(一部はメーカー名まであげて)説明している。また原書の特徴を生かすべく、わが国の実情に合わせた食物の紹介など、訳者により3つの付録がつけられていることも特記に値する。

あえて本書に注文をつけるとすれば、ここに記されている方法の根拠と結果を、実証的データとして示してほしい点であろうか。もっとも著者も「合理的方法論を提案」と述べており、実証は今後の課題として受け止めるべきかもしれない。

成人の嚥下障害の治療に関わる医師・言語療法士・看護婦・栄養部門などが、一度は手にすべき一冊と思う。

(B 5, 頁 122, ¥3,000, 1988, 協同医書出版社 刊)